



TITLE:

[書評] 高木正一譯註 「鍾嶸詩品」

AUTHOR(S):

釜谷, 武志

CITATION:

釜谷, 武志. [書評] 高木正一譯註 「鍾嶸詩品」. 中國文學報 1979, 30: 136-143

ISSUE DATE:

1979-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177352>

RIGHT:

書 評

高木正一譯註 『鍾嶸詩品』

(東海大學古典叢書)

東京 東海大學出版會 一九七八年三月 四四七頁

清の章學誠の「詩品之於論詩、視文心雕龍之於論文、皆專門名家勒爲成書之初祖也。文心體大而慮周、詩品思深而意遠、蓋文心籠罩羣言、而詩品深從六藝溯流別也。論詩論文而知溯流別、則可以探源經籍、而進窺天地之純、古人之大體矣。此意非後世詩話家流所能喻也。」(『文史通義』詩話)という指摘をまつまでもなく、梁の鍾嶸の『詩品』は、劉勰の『文心雕龍』とともに、中國文學批評史上、並び稱され、「流別を溯る」特徴を持つ點で異色の存在たり得ている。ここで私が紹介し、感想を述べようとする高木正一氏の『鍾嶸詩品』は、その『詩品』に詳細な注釋を施したものである。

詩人相互の影響關係の跡づけを試みる源流考察(「某人之詩、其源出於某家」の形で記されるのが多い)と、詩人の上下三段階評價とは、『詩品』の大きな特色であり、またそれゆえに、古來その當否が諸家の議論の對象となってきた。たとえば陶淵明が中品に列せられていることは、宋以後の詩話がこぞって批判するところである。(本書二、三ページ、『古典文學研究資料彙編、陶淵明卷』等參照) このことは、唐宋以後『詩品』が決して少なからぬ讀者を有していた事實を物語り、詩話類の出現とも何らかの關係があるのだろう。わが國でも平安時代の『日本國見在書目錄』に「詩品三卷」と著録されており、『古今和歌集』序に與えた影響のことはよく知られている。

しかし、本格的な研究が始まったのは、今世紀になってからであり、張陳卿氏の『鍾嶸詩品之研究』がおそらくその最初であろう。これに續いて研究注釋が次々に發表されたが、中でも本文に對する注釋として陳延傑氏『詩品注』と古直氏『鍾記室詩品箋』はすぐれ、殊に後者ののは詳細である。わが國の高松亨明氏『詩品詳解』(その後半、詩品研

究の第五章、序の位置、にみられる獨創的な所説には敬服させられる）、中澤希男氏「詩品考」（『群馬大學紀要』人文科學篇第七卷六號）も看過できない。

しかるに、「これらはそれぞれにすぐれた成果を収めながらも、こと文學評論用語の注釋に關しては、必ずしも満足すべきものではありえない。その缺を補いつつ、より完好な注釋を作製すべく」（本書はしがき）故高橋和巳氏の發案によつて、高木正一氏を研究代表者として詩品研究班が組織され、昭和三十七年度科學研究費による「鍾嶸詩品の研究」が發足したのである。この研究の内容は「鍾氏詩品疏」と題して、昭和三十九年十月の『立命館文學』第二三二號以降、次々に發表された。それらの疏を書物のかたちにとまとめたのが、今ここで取りあげる『鍾嶸詩品』そのものである。本書のはしがきで「體裁は討論の形態をのこすべく、ほぼ舊稿のそれに從つた。……ちなみに本書は形式上私の著書ということになっているが、實質的には本研究にご協力をいただいた方々との共著とすべきものであることを、この際とくにおことわりしておく。」と高木氏みず

から述べておられる通り、本書のいくつかの個所について、評者が『立命館文學』所載の疏と比較検討したけれども兩者間の大きな差異はほとんどないと斷言していると思う。

さて、本書の構成は、最初に解題が位置し、次いで中心たる、詩品序、卷上、中、下（それぞれ上、中、下品に相當する）の注釋があり、そして高木氏の論文「鍾嶸の文學觀」（創立百周年記念『二松學會大學論集』昭和五十二年十月、所收論文の再録）と官板吟窓雜錄本鍾嶸詩品の圖版とを附録し、最後に、文學評論用語を中心として、書名、作品名、地名、詩名を包括した語句索引と人名索引を併せ附している。

本書を繙いてまず第一に氣づかされるのは、本文校訂の確かさと注解の比類なき精密さである。この二つは決して切り離して考えるべきでなく、本文の校訂が信頼に値するものでなければ、そこに加えられた注解の信憑性も自然疑わしくなり、また注釋が詳密であればあるほど、校訂作業の精密さの度合いがいっそう増す。いわば相乗効果の表れといえよう。

一例をあげよう。下品、宋の謝莊、字は希逸の條の評文

(本書三三七—四〇ページ、讀點及び書き下し文は著者による。傍點は評者。以下同じ)は「希逸詩、氣候清雅、不逮於王〔范〕袁、然興屬問長、良無鄙促也」である。謝莊の詩には、すがすがしい上品な雰圍氣があるが、結局「王・袁」には及ばないの意であろうが、この個所、津逮祕書本のみが「王袁」に作り、諸本はいずれも「范袁」である。高木氏は「王は中品の王微、袁は同じく中品の袁淑、そして范は、おそらく下品の范曄であろう。」とし「諸資料を勘案すれば、どうも『王・袁』の方に分がありそう」だという。その論據として最初に引かれるのは『宋書』の謝莊傳に、袁淑と謝莊が「赤鸚鵡の賦」を競作し、淑が「江東に我無くんば、卿當に獨り秀ずべし。我は若し卿無くんば、亦た一時の傑なり」と嘆息した逸話の記載される事例である。

ところで「本書は底本として古直氏の『鍾記室詩品箋』を用い、本文に異同のある場合は、重要と考えられるものに限って諸本との校合を行な」(凡例)っており、右の例だけは、古直氏も指摘している。

しかし本書はそれにとどまらず『宋書』王微傳の「微は

文を爲るに、古なること甚しく、頗る抑揚す。袁淑之を見て、屈を訴うると爲す」を引いて、これらの資料から、謝王、袁の三人の間にある一定の關係が存在したことを推察する。さらに「王・袁」を併稱した例として「王・袁は宗を聯ぬるに龍章を以てす」(『文心雕龍』時序篇)をあげ、江淹の雜體詩で王微の「養疾」、袁淑の「從駕」、謝莊の「郊遊」が併置されている事實、鍾嶸自身中品で王微、袁淑を一グループにまとめて批評している點をも提示し、「同じ下品に列せられる范曄を比較の對象として持ち來たるよりも、中品に位置づけられる王・袁を呼び出し、『清淺』『風流媚趣』などの語を以って評される彼等の文學に近似する要素を含みながら、力量の點で劣る謝莊の文學を批評したものと解した方が、より自然であろう。」と結論する。博引旁證が論理の明快さと相俟って、誰しをも納得させるきわめて説得力に富んだ注解となり得ている。

先にも記したように、本書は多數の研究者の討議を経たものであり、解釋の際には恐らく議論百出であつただろうその情景は、本書の到るところに現出している。それら様

様の解釋を切り捨てて死産にすることなく、可能性のある多種の解釋をあたら限り載録して、讀者の判斷の材料として供している點は、良心的だといふべきだろう。そうした創見は隨所にちりばめられており、たとえば『詩品』序の終りの方に、漢から宋までの五言詩の傑作を挙げた所がある。その「……靈運、鄴中、士衡擬古、越石感亂、景純詠仙、王微風月、謝客山泉……」（二九ページ）で、「靈運の鄴中」が宋の謝靈運の「魏の太子の鄴中集の詩に擬す」を指すことに異議を唱える者はいないだろう。してみると、下の「謝客の山泉」はどうだろうか。「謝客」は、謝靈運の幼名「客兒」（二九六ページ、上品謝靈運の條の逸話を参照）に

基き、『詩品』序に見える「至於謝客集詩、逢詩輒取……」と同じく謝靈運のことで、おそらくは彼の山水詩を言うのだらうとは思ふが、確信はもてない。なぜなら、ここで謝靈運だけが「靈運の鄴中」とあわせて二度見えることになるからだ。そこで本書では、車中環氏のいう「齊の謝朓」説を紹介、検討した後、宋の謝莊ではないかとの解を試みに提出する。「謝客」がふつうには謝靈運を指すのだ

が、それでは、同一人物が重複して挙げられていることにつきまとう不自然さはいかんともしがたい。即斷できない個所である以上、あり得べき解釋のひとつとして意欲的に謝莊を挙げているのは、適切な措置といえよう。

六朝から唐にかけて諸家の討論を経た結果孔穎達の名を冠する「五經正義」を読めば、幾度となく繰り返されたであろう討論を當然のことながら彷彿するように、本書の讀者もまた、かつての詩品研究班のそれを想像することができる。さらに「正義」が經文の原意とどれだけ合致しているかという以外に、注釋の作られた時代の思考を記述した點にいつその價值をもつとすれば、本書も、高木氏をチーフとする同研究班の、研究の嚴密さと周到さを含む水準の高さを示す證左とならう。

しかし、なおここでその瑕瑾を指摘するとすれば、それは技術上の問題で讀者に對するいま少しの配慮の缺如である。二二一ページの序の、王融らが聲律論を主唱した所で、「〔於是〕士流景慕、務爲精密……」の「景慕」が全く言及されていないのである。ここはやはり、そこで知識人た

ちは彼ら（王融ら）を仰ぎ慕って云々、とても譯して、「景慕」の典故を示すべきではなからうか。それとも「景慕」のごとき誰でも知っているような語彙には不要だと考えられたのだろうか。それならば、ここから三十ページあまり読み進んで一五五ページの上品曹植の條「俾爾懷鉛吮墨者抱篇章而景慕、映餘暉以自燭」で、『藝文類聚』卷五十、梁の簡文帝の「雍州の賢能の刺史を圖する教」の例を引き、「仰ぎ慕うの意。」と記すのはなぜか。むしろ、序で典故を引いて曹植のところは省略しておくか、さもなくば、せめて序の個所で、その旨を注記してほしかった。或いは『立命館文學』に發表された疏の順序が上、中、下、序であったせいかもしれないが、七四ページ「或骨橫朔野、或魂逐飛蓬」の「朔野」「飛蓬」なども専門外の讀者のために、煩をいとわず説明しておいてほしい。なお、前者についてはかの李陵の「與蘇武書」中の「幾死朔北之野」が鍾嶸の意識の片隅にあったかもしれない。

二七九ページ中品謝朓の條「……足使叔源失歩、明遠變色」で、「失歩」は沈約の賦から使用例を引いて「足がも

つれて歩けないこと。ここは轉じて、謝混が、その下流に立つ謝朓の詩の『奇章秀句』の『警適』さにびっくり、足がもつれて歩けなくなるの意であろう。」と述べ、引き續いて『變色』とは、これまたその『警適』さに壓倒されて顔色を失うこと。」というが、ここの上の句にならって「鮑照が」と主語を入れた方がはるかにわかりやすくなるだろう。なるほど、叔源、明遠がそれぞれ謝混、鮑照の字であるのは、卷末の索引を使用すればすぐわかることだし、そのためにも索引を充實させているのだと言われればそれまでだが、研究者ならいざ知らず、謝混や鮑照の字についての知識は、讀者一般のものではないだろうから。鮑照のことでついでに言っておくと、中品、宋の謝瞻ら五人の條で「鍾嶸が張華に源流すると説く詩人は、この五人と、『其の源は二張に出づ』という潘岳である。……これら五人の詩がもつ『風流媚趣』、すなわち優雅ではなやいだなまめかしさが、張華の詩風に近似し、潘岳も同じくその系譜にあると、鍾嶸は考えたのであろう。」（二六五ページ）「五人の詩にみられるこの特色は、上にも述べたごとく、張華

の『妍冶』『茂先（張華）の靡曼を含む』といわれる潘岳のそれと類似するものである。」（二六六ページ）の「潘岳」はいずれも「鮑照」の誤りである。

ここまで評者は、こまごまとした不満をつらつら述べてきた。これらはいずれも技術上の小さな問題で、容易に解決できるものである。しかしながら、事はもう少し深く本書の形式そのものと関わっているらしくみえる。本書は詩品研究班の研究記録の再編という形をとっており、それゆえに一個人の手になる注解書とは一味違った趣きをもっているのだが、反面全體としての一貫性、統一性を缺くうらみがある。「譯註」と銘うっているにもかかわらず、譯が不充分的印象をうける。なかでも、詩評の後に引かれた逸話の譯に對してその感が強い。もう少し懇切であつてもいいのではないか。高木氏のかつての著書『白居易』上・下（岩波書店、中國詩人選集）『唐詩選』上・下（朝日新聞社、中國古典選）はともにひろく江湖に迎えられて、今もたびたび版を重ねていると聞く。これらは各々の叢書獨自の形式に則っていることもあるけれど、選びかつ鍛えぬかれた譯注

が施されている。後者はとくに、解説調の文體によりながらも、逸することなくいいねいな譯がその中に包含されている。もちろん「一般にわたしが専門學者にもとめるのは、注であつて、譯ではない。ただし、その文章が文學的價值をもつてゐるやうな注。」（石川淳氏『文林通言』であつてもいいのだが、ここでは今ひとついいねいな譯がのぞまれた。

文學批評を讀んでいく上で、どうしても我々の前に立ちはだかる最も大きな障壁のひとつは、批評用語のもつ特殊性、辭書的意味では覆いきれぬ微妙さである。本書はとりわけこの方面に多大の注意と努力を拂っており、本文解釋の上ですぐれた見解が各所にうかがえる。中品、魏文帝の條の「體則」（二〇六ページ）、下品、齊高帝の條の「少」（三五二ページ）など嚴密な點は數えきれぬが、そうであるがゆえにかえつて、數少ない不注意な點が目立つ。上品、晉の阮籍の條、「而詠懷之作、可以陶性靈、發幽思」の注解文で「……その詠懷詩なる詩形式は、個人の『性靈を陶し、幽思を發す』ることを十分に可能にさせる。」（二六六

ページ)「要するに、『詠懷詩』のスタイルは、詩人のうちなる自然のたましいをはぐくみ、深く心中にひそみかくれた思いを外發させるのにふさわしいものだ、と鍾嶸は提言するのである。」(二六九ページ)とある。もとより高木氏が原文の「詠懷之作」の「作」を「詩形式」とか「スタイル」などと解しておられるとは思わない。「陶公詠貧之製、惠連擣衣之作」(序、一三二ページ)の「製」「作」と同じく詩作品というほどの意に考えておられるのだらう。ただ、スタイル、形式といった術語は、本書に頻用される「體」や「文體」と比較的容易に對應するし、それらにしても、形式でなく、本質といった意味の方が近い場合もまゝある。ましてや、この「性靈を陶し、幽思を發す」のに十分な力をもっているのは、詠懷詩という連作の形式ではなく、内容をも含めた全體としての詠懷詩そのものである。したがって、ここで詩形式とか詩のスタイルとかのまぎらわしい(誤解される危険性の大きい)用語を使うのは、慎重さを欠いていると言われてもやむをえないのではないだろうか。

既に記した通り、本書は古直氏の『鍾記室詩品箋』を底

本とし、本文の異同は重要と考えられる場合、諸本と校合しているのだが、中品、梁の任昉の評文「善銓事理、拓體淵雅、得國士之風」は、諸本すべて「善」を「若」に作る。たしかに「若」よりは「善」の方がここはまさると思う。

しかし、『歷代詩話』本をはじめ古直氏、陳延傑氏『詩品注』、許文雨氏『鍾嶸詩品』(『文論講疏』所收)すべて「若」で、『吟窓雜錄』本(紅葉山文庫舊藏の嘉靖刊本で、現在内閣文庫所藏のみが「善」に作る。にもかかわらず、このことは一言も書かれていない。せめてテキストに異同があることくらいは記すべきだらう。他の個所の本文校定が精確であるだけに、不親切さがよくいに残念に感じられる。

中品の最後、沈約條で「雖文不至其工麗、亦一時之選也」と讀點を打ち、沈約の詩が巧みな美しさを持つ段階にまで達していないと解している(二九六ページ)が、「雖文不至、其工麗亦一時之選也」と讀めないだろうか。任昉條に「彥昇少年爲詩不工、故世稱沈詩任筆」と、散文の名手任昉が詩を得意としなかったから、詩に工みであった沈約とならべられており、沈約の「憲章」する鮑照が「貴尚

巧似」つまりたくみな寫實描寫を重視したとと關連して、「其工麗」は沈約のもつたくみな美しさを言うのではないか。後考に待ちたい。

それから讀者の希望としては、各々の詩評に附してその詩人の實際の詩を掲げておいてほしい。中、下品の數人をまとめて論評している條は別にしても、せめて上品に入れられる詩人の場合、鍾嶸の批評の對象となつたのが一、二首なりとも挙げられていけば、彼の論斷に贊同するにせよ、或いは疑義を抱くにせよ、いずれにしても、讀者にとって便利だと思う。もっとも一首の詩で一詩人の全體を代表させることは困難であり、不可能でさえあることは充分承知のうえだが、作風の一端を知る手がかりとしての效用はみすごせないだろう。そうなれば、ともすると「詩を讀まず、詩評を讀」み、空論の方向に進みがちになる弊も少しは除去されるのではなからうか。

一方、卷末の索引は文學評論用語を中心に檢索の便を圖っており、非常に有益であつて批評史研究を進めていくにおいて大いに活用すべきであらう。また高木氏の「鍾嶸の

文學觀」も『詩品』を通して窺われる鍾嶸の文學に對する特徴的な見方、評價の基準を剔出して、彼の文學觀の概要を知る上で裨益するところ甚大であらう。

以上、私の感想は獨斷と謬見のそしりを免れないかもしれない、紹介の任を果すどころかかえつて悪い印象を與えてしまつたのではないかと畏れている。博雅の士の叱正を待つ。

〔追記〕 本書についての中森健二氏の書評が『立命館文學』第三九六・七號（昭和五十三年七月）に掲載されており、本稿校正中に讀む機會を得た。その中で氏は、鍾嶸と沈約との間に謝靈運を介在させることで、兩者の對立をより明確に捉えようとしておられる。併せて參照されたい。

（京都大學 釜谷武志）

平野顯照 『唐代文學と佛教の研究』

（大谷大學中國文學會研究叢刊）

京都 朋友書店 一九七八年五月 本文四二九頁

索引二〇頁 寫眞二葉